

石造文化財編



宮前型灯籠



四角形石灯籠

大歳神社の石造物一

(琵琶甲町)

境内へ石段を上がると、階段両側に長石製の宮前型の石灯籠一対が建立されています。構成を下部から見ると、厚さ約20cmの方形基壇を三段積み重ね、その上に高さ約45cmと短く三味線の撥形をした竿を置きます。竿の上には、方形の中台、火袋、笠、宝珠を順に積み重ね、総高は約175cmあります。なお、火袋の

二方には四角窓をあけ、残り二方には円窓などを開けています。竿には、「御神燈」の文字とともに裏に寛政7年(1795)の年号を刻んでおり、制作時期が明らかかな当社の石造物では最も古いものになります。この宮前型の石灯籠の形が播磨で普及・定着するのは、文化・文政期(1804~29)と云われていることか

ら当該品は一般的な形といえます。境内奥には、最上端の宝珠が剣菱型を呈する高室石製で火袋の平面形から四角形石灯籠と呼ぶ形のものが2基東面して建っています。その内、北に位置する石灯籠は、総高約170cmあり、竿から下部は先述した宮前型とは異なる方柱状になります。竿の断面は、一辺長約25cmで竿正面に「御神燈」、側面には文政10年(1827)の年号と「當村氏子」の銘が刻まれています。同じ社寺に献灯された石灯籠でも形、石材等から違いを見つけ、また制作年代、石工等の銘文を見つけるのも、おもしろいものです。

道するべ

No. 247

病気の苦しみを一層深めていませんか?

病気に対する正しい知識や理解が不十分のため、病気を患った方々、例えばHIV感染者、ハンセン病患者(元患者)、また難病患者等は、誤った知識や偏見により職場での迫害、就職時の差別、保育入園の拒否、登校・入学拒否、医療現場における差別、マスメディア報道によるプライバシー侵害等さまざまな人権侵害を受けています。

「差別」は、する側の想像を遙かに超えて、された側を追い込みます。誰もが病気になれば、苦しみ、闘い、或いは受け入れることを強いられるでしょう。私たちは、病気を正しく理解すると共に、その苦しみや痛みに思いを馳せることも忘れてはいけません。

『(ハンセン病を)発病後、人目を避けるため裏の奥座敷に独り籠もっていたが、村の人がそれを知って、妹や弟が学校でいじめられていた。

私のために家族にこれ以上迷惑を掛けることは忍びないと思い、家を出て海岸辺に「隔離小屋」を立ててもらい、そこに独り暮らしことにした。隔離小屋の生活では、時折「ハブ」が出るが、「ハブ」はこちらがいじめなければ何もしないので、少しも怖くなかったが、それよりも、何もしない私に石を投げたり、悪口を叫ぶ人間のほうがよっぽど恐ろしかった。

「ハンセン病医療ひとすじ」(犀川一夫著)より

いきいき教育

先輩の指導で盛り上がるふれあい音楽祭

はじめに

本校では、例年十一月に市民会館で、「ふれあい音楽祭」を行っています。

学級毎に自分たちの合唱を発表します。それは一学期の終わり頃から準備にかかり、音楽の時間はもちろん朝や放課後

もクラス一丸となって練習します。生徒たちには楽しみでもあり、クラスづくりのチャンスでもあります。

また、PTA合唱も百人を超え、花を添えています。

声楽家大野一道先生を招いて

長年PTA合唱の指導をお願いしてきましたが、四年前からは生徒の合唱指導もお願いしています。

今年も、全校生に、発

声練習を含めた歌の基礎についての講話をお願いしました。その中で、教科書にあり、生徒がよく知っている日本、ドイツ、イタリアの歌曲を自ら歌い、それぞれの違いと良さを具体的に



に説明されました。続いて、各学年毎に「課題曲」の指導をしていただきました。歌詞の持つイメージをふくらませ、聴き手に伝わりやすい表現の仕方や工夫、指揮の役割や魅力、曲の盛り上がる工夫、リズムに乗って楽しく表現する工夫など細かく指導いただきました。

生徒は、大野先生の生の声にふれ、その迫力と美声に大変感動しました。また、情感あふれる説明に、理屈抜きに先生の指導を実践していき、ました。そして、「すごくわかりやすかった。」「今まで音楽の授業などで学習していたわかったが実践できなかったことができた。」と感想を述べました。

「いきいき学校」応援団

大野先生は本校の卒業生です。まさに「ふるさとの先輩」です。

プロのテノール歌手の魅力を身近に感じ、その指導で大きく伸びる生徒たち。これからも引き続きご指導をお願いしたいと思います。